

第5回 小中一貫教育懇話会

議事録 要旨

1 開催日時 平成25年6月20日(木) 19:00~21:00

2 開催場所 生駒北小学校多目的室

3 参加者 11名

小柳和喜雄（奈良教育大学教職大学院教授）、中谷辰幸（生駒北小学校育友会長）

影林保志（生駒北中学校育友会顧問）、正田文敏（打田・高船保護者代表）

藤堂宏子（ひかりが丘自治会会長）、窪田博明（久保自治会顧問）

十文字良明（生駒北小学校長）、本田善藤（生駒北中学校長）

柳田富恵（生駒市校園長会長）、政岡俊伸（生駒北中学校教諭）

井上園子（「i どばた会議」共同幹事）

4 開会あいさつ （峯島部長）

5 質疑応答

座長： アンケート結果について意見を伺いたい。

参加者： ビジョンやイメージを明確にしてほしいという意見があった。後からの市教委の説明で聞かせていただく。

参加者： 小中一貫教育に対する意見の中に疑問に思っていることと希望することとがある。それを整理して、疑問に対しては答えていく必要がある。

事務局： 疑問の多くは1回目の説明会のアンケートだったので、それを基にした説明を2回目の説明会で行った。

座長： 疑問に対する答えを一覧にして分かりやすく整理してほしい。それを自治会や保護者が集まるところで資料として活用したい。小中一貫教育に関するQ&Aとして、そんな資料があればいいと思う。

事務局： 疑問に対してその答えを返していく。

参加者： 生駒北小と北中で3月に行ったアンケートとよく似た意見が出ている。3月は「なぜ住民に知らせることなく小中一貫校の設置を決めるのか」という入口論だったが、今は「設置した場合、どうなるのか」という話し合いになっており、進んでいることを感じた。

座長： 時間の経過とともに、小中一貫教育の中身についての意見が多くなってきた。疑問点については分かりやすく整理をし、これを利用できるように集約をしなければならない。

参加者： 去年の12月のタウンミーティングから始まった小中一貫教育の説明だが、当初は低かった理解度が少しずつ高まってきている。10月の意見の集約に向けて、小中一貫校連絡会「iどばた会議」を立ち上げた。北小と北中だけでなく、幼稚園や保育園、普賢寺小学校の保護者も対象で、一貫校への理解を深め、幅広い意見を聞き、その意見を懇話会に反映させ、そして保護者の「わ」を育みたい。幹事が12名おり、そのうち女性は7名である。情報交換や保護者同士の意見交換、先進校の視察や交流、アンケート等を行うつもりだ。これは、6月8日に立ち上げた。10日に富雄第三小中学校のPTA会長と会い、小中一貫校設置に向けてPTAとしてどんな働きかけをしたか、当時の活動の様子を聞いた。そして、17日から19日まで北小にて保護者の意見を聞く場を作った。20日は高山幼稚園の保護者の意見を聞いている。7月以降にはアンケートを行い、9月にも最終的アンケートを取る予定である。保護者の生の意見を吸い上げ、出てくる意見を伝えたい。

直接意見を聞いた幹事の1人がこの連絡会の活動について皆さんにお話ししてもいいか。

座長： 反対がないようなので話していただく。

共同幹事： 富雄第三小中学校PTA会長と出会うと交流したことが、私たちの気持ちのパワーアップにつながった。この4日間を振り返ると、1度目のタウンミーティングで保護者が抱いた「何でここで小中一貫教育なのか？」という気持ちと市に対する不信感や苛立ちはなくなった。市の話聞いて自分が分かっていることを伝える中、保護者達は小中一貫校に理解を示し、市に対して抱いていた悪い印象を変えていった。4日間で40人の保護者が集まっている。この40人がまだ理解できていないほかの人たちに語ってくれたらいいなと考える。市の出したものは腹立たしくて見たくないという人がいたが、前向きに考えないと始まらない。ある保護者は「市に特別なことをしてほしいとは思っていない。学力についてもそうである。クラス替えがある、好きなクラブが選べる、そういった普通のことを求めている。そうなれば、通学区調整区域の範囲を広げたり、スクールバスを走らせたりすることも必要だろう。1クラスが41人以上になると2クラスにできるので、目標は41人だ。そんな具体的でできそうな目標としっかりとしたビジョンがほしい。」と話した。今まで言える場所や共感してもらえない場所がなかったからこれからはこういう場所が必要だと思う。また、他の保護者はせっかく新しくなるのだから日本初のものを、と言う。保護者はだんだん夢を語り始めており、わずか2~3時間で市と保護者との溝が埋まってきたのを感じている。

母親が笑っていれば子どもが笑っている。それを支えるのは父親である。学校の様子や先生の頑張りを一番理解しているのが母親である。母の不満と熱い思いを伝えるのがこの場であろう。私は、1学年の人数が少ないので縦のつながりよりも横のつながりを持たせ、クラスの人数の少なさを不安に思わないよう、また希望を持てるようにしてほしいと思っている。また、打田・高船の子どもたちへの配慮も必要だが、生駒市と京田辺市の教育委員会が協力し、高山の勢いが普賢寺小学校へも影響し、お互いのレベルが上がればいいとも思っている。

どうなるか分からないことに賛成や反対を言えないという意見もある。議論はかなり煮詰まってきたと思うが、まだ前を向いて考えられない人もいるので、そういった人が小中一貫教育に理解を示すまでの時間が欲しい。母の不安を取り除くことを市や学校の先生に求めるのはおかしいことだ。親同士で話をする時間がほしい。市教委にもプリント等でお知らせしようと思う。

座長： 限られた時間でこんな活動をしてきているのはうれしい。顔を合わせることで不安を取り除こ

うとしている。4日で40人が参加したとはすごいことだ。

参加者： 「i どばた会議」に2回参加した。とても居心地がよかった印象である。心地いいわけは、1人ひとりの意見を尊重し、共感してもらえるから。笑いもあり、教えてもらえることも多いからだ。大勢の中で意見を言うのは勇気がいるが、このような会だと気軽に意見を言える。私らも頑張るから先生も頑張っていて、と後押ししてくれる応援団であることを、参加して認識した。

「i どばた会議」には富雄第三小中学校のPTA会長も来ていた。学校に子どもが多いのはいいことだという思いが小中一貫教育を進めていこうとするスタートになったらしい。また、中学生が頼られていることがいいとも言っていた。小中一貫教育がよかったかどうかはまだ判断できない。しかし、よかったと言えるように私たちが引っ張ってきたんだとおっしゃった。

参加者： 北中校区8つの自治会で小中一貫校について9日に話し合った。地域で学校を支えていきたい。生徒が減る中で魅力ある学校、来たいと思う学校にしていきたい。先端大の親に協力してもらえるよう通学エリアを広げていただきたい。教育に意識の高い子どもたちだと思うので高山地区の子どもにとって刺激となる。市に要望することだけでなく、自分たちでできることはやるといった姿勢が大事だと言っている。「i どばた会議」の素晴らしさは、意見を否定ではなく肯定することから始めていることだ。子育ては男性もするので、男性も参画できるような会にしてほしい。

参加者： 話が前に進んでいこうとしているが、打田・高船の私たちの中では何回か前の印象でとまっている部分もある。まだまだ話し合いができていないので、高山地区でバスが動き出しているのだが、それに乗るべきかどうか迷っている。教育委員会とも話し合いの機会を持ち、また保護者の意見を聞く地道な活動もしなければ、と思った。

共同幹事： 打田・高船から参加された若いお母さんの話を聞くと、情報が伝わっていないように感じた。打田・高船に来てほしいと言われた。私たちより打田・高船の保護者の方が不安な気持ちでいる。それは人数が少ないから。つながりや輪を広げるいい機会なので、打田・高船の方にもかかわっていただけたいと思っている。

参加者： 保護者が情熱的であり、いいことだと思う。小中一貫教育で新しい学校文化を創り、教育の質を変え、そして学校も地域も保護者も変えていくという発想がないとだめだ。否定から始まるのでなく、不可能を可能にするという意気込みを持たないといけない。打田・高船の子どもたちを小学校から受け入れるという発想、その実現のために汗を流すこともいいではないか。市は当初より地域の意見を受け入れてくれている。

座長： みなさんがそれぞれの会の代表者として懇話会に参加し、その活動が着実に動いていると感じる。

共同幹事： 保護者の中には「どうせ市はするんやろ」という人がいた。しかし、「どうせ」というあきらめからはいいものは生まれず、市はこの地域のことを親身になって考えてくれている。「どうせするんやろ」という考え方を変えなければいけない。私は「先生や教育委員会に何でも言ってい。分からないことがあれば一緒に言いに行くよ。」と保護者に言っている。「どうせ」がスタートにならないようにしたい。

座長： 学校で先生方はどう考えているのか。入り口論で「おかしい」と言われていたが。

参加者： 教育長が資料を用意して説明に来られた。それ以後先生方は安心したようだ。

参加者： このチャンスをうまく利用して中学校を残したい。連携することでこの地域の子どもを育てたい。

このチャンスを逃すともったいない。中学校の存続自体が不安になる。市のビジョンができているようなので、これを基に職員と話ができたらと思う。

参加者： 私は生駒北小学校で勤務した。この地区の子どもたちは「どうせここは田舎や。」と言う。全国でも有名な茶釜の産地であることを知っていても、である。もっと胸を張れば言いやん、田舎は悪いことばかりでないのに、伝統といういいものを持っているところなのに、もっと自信を持てばいいのにと思った。隣接校選択制度で生駒北小を見に来る親子がいたが、少人数でアットホームなことをアピールしても入学してくれない。校舎が古いと来る気持ちも失せるのだろう。子どもたちの自信がなくなるのも無理はない。小中一貫校となり、新校舎になれば子どもたちも自分の学校に自信を持つのではないか。茶道体験学習ではお菓子をいただくときに隣の人に「お先に」と断ってからいただく。人への優しさや関わりや心遣いを学ぶこのような体験学習はとても大事で、これを小中9年をかけて行うことに魅力を感じる。

教員の免許の問題だが、小中両方の免許を持つ先生は多いと思う。小学校で勤務しているが中学校で教えたかったという先生もいると思う。その逆もあるのではないか。

座長： 小中一貫教育について、もう少し話を進めていけばいいのではないかという意見である。子どもたちもビジョンがあって初めて「こんな学校に行ってみたい、学びたい。」と思うだろう。ビジョンについての説明を市教委からしていただく。

事務局： 「小中一貫教育のイメージ」として資料を提示した。地域の伝統と先進に基づいた魅力ある学校を目指している。懇話会で何度も出たが、学校・保護者・地域が三位一体となって「伝統と先進」に基づく教育を支える。地域と学校が結びつく学校、地域の人同士が結びつく拠点としての学校をめざそうと考えている。

一貫教育では小中学校の教員が同じ施設の中において教科指導と生徒指導を充実させていくことができる。ここでは小学校高学年から教科担任制に馴染ませて、ギャップを解消しようと思う。特色ある教育課程の3つの柱を考えた。新しい学校文化を創造するというのが懇話会でも出てきたので、ありきたりの言葉を使わないようにしている。少人数を生かしてICTを利用した教育を行う。たとえば普賢寺小学校との交流授業やタブレットを使った協働教育の授業である。9年間見通した体力向上推進プランを作成し、部活動も5年生から始められるようにしたい。

中学に入学した時に進学したという実感がなく、高校進学時にカルチャーショックを受ける不安が指摘されてきたが、小柳先生も言われているように意図的に段差をつけることでそれを解消しようとする。人間関係を構築し、対立を回避する力をそこで育てていく。たとえば7年生は通常の中学校では年上を頼る存在だが、小中一貫校では1年生と7年生が活動し、7年生が頼られる存在となり、そこから人間関係を構築する力をつける。また、行事等は効果のあるものは小中合同で実施したい。

生駒市はかつて情報教育に熱心に取り組んできた。物事を批判的に考える力の育成は情報活用能力の中心に据えてきた。それを継続させ、情報教育で、他人の考えを理解する力や人間関係を構築する力をつけることにも力を注ぐ。

先端大との連携も推進していきたい。先端大留学生に来てもらうことも考えている。生駒市は外国語教育、国際理解教育を熱心に行っており、3年生から外国語指導助手を配置して授業を行って

いる。小中一貫教育を考えるとときに技術論に偏りがちだが、自らの将来を考え、社会の発展に寄与できる子どもを育てることも柱の1つとしたい。

参加者：非常に分かりやすくていい。すべていろんなことを網羅して書いてくれている。外国語教育は3年生より1年生からの方がいいのではないか。9年間を見通しての教育であることがわかる。小学校高学年からの部活動はとてもいいと思う出来事が先日あった。北小では育友会が主催してミニバスケットボール教室をしたのだが、中学生が教えに来てくれた。5・6年生に寄り添う中学生、小学生を支援する中学生を見ていいなあと思った。

参加者：このビジョンは9年間を見通したものである。小学校の校長と話し合い、これを基にどれくらい広げていけるかを考えたい。夢や希望があるものにしたい。例えば風力発電等の夢のある施設を取り入れ、「このような学校なら行きたいなあ」と言われる施設を作りたい。

参加者：確認したいことがある。小中一貫校にならなくてもできたこと、つまり今の体制でもできたことと小中一貫校になってできることを明確にしてもらいたい。

参加者：今の体制でできることは既にやっているはずだ。先端大の関係者の子どもはそう多くないので、みんなこちらに来て2学級にはならないようだ。小中一貫校では地域住民からなる学校評議員会をグレードアップさせ、チェック機能を持ったシステムで運営できないだろうか。小中一貫校は目的ではなくきっかけである。ジャンプするためのきっかけである。小中一貫教育をツールにして何ができるのか、それが問題となる。

共同幹事：一貫教育という爆弾を落とされたという思いが以前はあったが、今は市に「どうかいい施設を作ってほしい」と胸を張って言える。設立5年後、落ち着いた時が問題だろう。一貫校でない学校から教師が転勤してきたときである。親がかかわった分だけいい学校ができるのではないか。だから保護者は先生に協力しようと思う。一貫校での人間関係は9年間続く。中学生ギャップより高校生ギャップの方が心配なので、子どもたちが人間関係を広めていけるような指導を望んでいる。この地区の中学生は幼い気がする。公園で小学生と遊ぶ中学生を見てそう感じている。

参加者：これを練って肉付けをしていこうではないか。小中一貫校の課題として提起する。これは地域ができなかったことで市の問題ではない。今後は地域と市が緊張ある関係を築き、地域コミュニティについて検討していくことが大事だろう。全国どこでも地域の絆が薄れており、コミュニティの再生や再構築が必要だと言われている。田舎でさえそうだ。このイメージ案は大変ありがたい。

参加者：9年間の一貫教育でいい子ども、立派な子どもを作って欲しい。市のイメージ図はてんこ盛りで、品数がいっぱいある幕の内弁当だ。今後はこれをもとにして「iどばた会議」で話し合いたい。お母さん方の意見もたくさん聞いていくが、男もがんばれと言われるなら頑張る。

参加者：人間関係は多い人数のなかで育つか？そうではない。1学年4クラスや5クラスでは5年になっても初めて出会う子がいる、連絡会をしっかりしているが思うような生徒指導ができない、大丈夫だと思っていたのにうまくいかないことがある。数ではない。子どもたちにとっては頼られることが大事。頼られているという気持ちが自己肯定感を育てる。自分に自信がないからいじめるのである。小さな子から頼られると思いやりの心が生まれ、自己肯定感が育つ。

座長：学校の出口について気にするのは中学校の先生である。つまり進学ということだ。出口の学力は小学生から9年かけて育てないといけない。ドイツは小学校は4年で、どちらかというと小学校で

は教え込み教育を行う。知識を教え込まないと中学校の校長から進学のための書類を突き返されるからである。

市が提供したイメージをもとに懇話会で活発に話し合い、焦点化していきたい。

6 事務連絡 (事務局)

○7月 4日(木) 先進地視察：大原学院に行く。

○7月 25日(木) 第6回懇話会：生駒北小学校多目的室、19:00~21:00、傍聴可能。

7 閉会あいさつ (峯島部長)